

2020年 東京弁護士会 新年式

総務委員会委員長 遠藤 常二郎 (39期)

本年の東京弁護士会新年式は、2020（令和2）年1月10日午前10時30分からクレオで開催された。



当会の篠塚力会長から年頭の挨拶がなされ、続いて来賓として出席された菊地裕太郎日本弁護士連合会会長、木澤克之最高裁判所判事、森まさこ法務大臣の名代として出席された金子修司法法制部長、垣内正東京地方裁判所所長、曾木徹也東京地方検察庁検事正がそれぞれ祝辞を述べられ、在会50年、90歳、永年勤続職員として表彰される方々と、第34回東京弁護士会人権賞の受賞者に対して、お祝いの言葉を寄せられた。

在会50年表彰では10名、寿齢90歳表彰では6名（重複表彰1名含むため合計15名）が出席された。被表彰者を代表して福家辰夫会員からご挨拶を頂いた。

第34回東京弁護士会人権賞は、特定非営利活動法人OurPlanet-TVが受賞された。同NPO法人は、社会的弱者、少数者の視点から独自番組を制作し、インターネットで配信している。また、特定の企業や行政等からの広告収入に依存することなく、独立性の高い運営を行っている報道機関である。

特に福島県の東京電力福島原発事故については、福島県が行っている「県民健康調査」等をはじめ、被災者の視点に立って継続的な取材を行い、原発被災者の権利救済、さらには放射線被ばくや研究倫理等に対するリテラシー向上につながる活動を展開されてきた。このような活動は、まさに在野の人権活動に光を当てるものとして今回東京弁護士会

人権賞の受賞に至った。受賞後、同法人を代表して、代表理事の白石草氏が受賞の挨拶を述べられ、受賞の喜びとともに現場の取材の状況など臨場感をもってお話しされた。

式典終了後、引き続き開催された新年祝賀会には多数の会員が参加した。恒例の清酒の鏡開きに始まり、最後は若松巖常議員会議長の華やかな万歳三唱で閉会となった。

本年の新年式は例年に比較して参加者がやや少なく、総勢約174名であったが、祝賀会においては、会員同士、和気あいあいと和やかに歓談することができ、新年のスタートを飾るに相応しい当会の行事であった。



読売巨人軍をお呼びして ブラッシュアップ研修会報告

骨髄等提供同意立会特別委員会研修員 真鍋 敬治 (71 期)

骨髄等提供同意立会特別委員会は、公益財団法人日本骨髄バンク（以下「骨髄バンク」という）からの要請に基づき、非血縁者間における骨髄移植または末梢血幹細胞移植について、そのドナー候補者の最終同意に立会う「立会弁護士」の派遣業務を行っています。

立会弁護士は、3年に1回新規登録講習または登録弁護士用の「ブラッシュアップ研修会」を受講することが登録維持要件となっており、本年度のブラッシュアップ研修会は2019年11月20日に開催されました。今回は、読売巨人軍で選手・コーチとして活躍された鈴木康友氏と株式会社読売巨人軍の営業企画部の横田直道氏にご講演頂きました。

鈴木氏は、長嶋監督のもと、読売巨人軍の内野手としてご活躍されました。1992年に引退された後は、コーチとして後身の指導や野球解説に従事されていましたが、2017年の夏、血液の難病「骨髄異形成症候群」と診断され、2018年に臍帯血移植を受けられました。そのご経験を元に、ご講演頂きました。

鈴木氏の講演は、第一声「〔臍帯血移植によって）O型からA型に変わりました鈴木康友です」との話から始まり、ノック10本で息が切れるようになり病院に行ったところ血液検査で即入院となったこと、グラウンドに復帰させるというT病院のT医師との出会いから臍帯血移植を決意したこと、などのお話を頂きました。ドナー登録を迷われている人には、鈴木氏自身も救われたように、それにより救われる人がいるということを認識して欲しい、とレシピエントだからこそいえる感謝と後押しの混ざったお言葉を頂きました。

横田氏からは、元同軍投手の上原浩治氏を筆頭に、株式会社読売巨人軍はかねてから骨髄バンクを支援してきた



ことなどのお話に加え、ご自身が実際に骨髄を提供された経験等についてお話を頂きました。横田氏がドナー登録した当初、周囲には反対されたが、ご自身に迷いはなかったこと、提供が決まりレシピエントが移植前処置（全身放射線照射などによりレシピエント自身の免疫を抑制する処置）に入った後は、自らが事故を起こさないようにプレッシャーがかなり大きかったことなどをお話し下さいました。また、骨髄採取時にドナーに重篤な障害が生じた例はほとんどなく、このことを広く世間に知ってもらうこともドナー登録者を増やす後押しとなるのではないか、などのご提案も頂きました。

研修会後半では、立会経験弁護士間で立会同意の際の経験を共有し、これについて議論しました。

ブラッシュアップ研修会は、今回のように骨髄等移植について患者、ドナーの経験者などからお話を伺ったり、医学的知識について医師の講義を受けるなどしているものです。今回、レシピエントとドナー双方のお話を同時に頂戴することができ、非常に有益な機会となりました。

「映画を観ながら死刑について考えるシンポジウム」報告

死刑制度検討協議会副座長 神谷 竜光 (67 期)

本協議会は、日弁連の福井宣言を受け、会内の議論の活発化を目指し、2019年11月6日に、「映画を観ながら死刑について考えるシンポジウム」を行った。

1 シンポジウムの構成

シンポジウムは、法務大臣を経験した平岡秀夫弁護士（第一東京弁護士会）を話し手、筆者を聞き手とした死刑制度に関する概略的講演を行い、その後、『HER MOTHER 娘を殺した死刑囚との対話』の上映を行った。

2 平岡弁護士の講演について

平岡弁護士は、現在、日弁連の「死刑廃止及び関連する刑罰制度改革実現本部」顧問で死刑廃止派としても知られているが、民主党政権時代の第88代法務大臣となった当時は、死刑廃止論者ではなかった。ただ、法務大臣を経験し、死刑囚の死刑執行を命じるかどうかで死刑制度について考え、結果的に執行をせず、その後も考え続けた結果、死刑廃止派としての考えを固めるに至った。ここでは特に、法務大臣時代の法務官僚とのやり取り、その後の選挙区での出来事を記したい。

平岡弁護士は、2011年に法務大臣就任後、「死刑執行を考えてみたら」ということになり、法務官僚に、「今、死刑執行に最もふさわしいと思う人の記録を持ってきてほしい」と伝えた。そして、法務官僚は、平岡弁護士が死刑執行に積極的でないことを踏まえ、再審申立もなく、世間的な話題も集めなかった2名の確定死刑囚の記録を持ってきた。平岡弁護士は、記録を精査するとともに、省内会議を行ったが、「EUであれば死刑で命を奪われることはない。日本にいるから死刑執行されるというのは、如何なものか」と考え、この2名の死刑囚の死刑執行を認めなかった。

法務大臣離任後、安倍晋三議員（当時）が選挙期間中の自民党候補者への応援演説で、平岡弁護士が死刑執行しなかったことを捉えて、「犯罪者に優しく、被害者に冷たい人」と非難したという。結局、平岡弁護士は2012年の総選挙で落選している。また、選挙区では、当初は平岡弁護士を応援していた人達から、「死刑廃止を言うなら、もう

応援できない」と言われたこともあった。

3 上映映画について

映画についての直接的な内容の言及は、ネタバレになるため避けたい。以下、筆者の雑感を記したい。

本映画では、殺害された娘の被害者遺族として、母親と父親がいる。そして、これらを取り巻く母親の親族、死刑囚である娘の夫とその母親という人間関係がある。

筆者は、この登場人物それぞれが、死刑制度を取り巻く議論のスタンスを象徴しているように感じられた。母親は、事件の真相を求め、死刑囚の死刑執行を止めてほしいと考えるようになる。父親は、一度は宗教的な赦しを求めつつも、死刑囚に対する死刑執行は追及する。そして、母親の親族は、直接の被害者遺族ではないが、殺人者は死刑であるべき、被害者遺族が死刑を求めないのはおかしいという“世間”の意見を表していると感じられた。

4 結び

時の法務大臣の態度などが誰が死刑執行されるかの選別に影響しうること、そして死刑を執行するかどうかという人命の問題が政治利用されることの是非は、死刑存廃を考える上での直接の考慮要素ではないかもしれない。しかし、このような生々しさが死刑制度に付きまとうことは認識する必要がある。

また、日本では、世論調査によって死刑制度が肯定されており、その主な理由として被害者遺族の感情が挙げられることがある。しかし、この映画を通じて、被害者遺族というのが決して顔のない抽象的なものではなく、それぞれがそれぞれの考えを持つ生身の人間として考えられなければならないことを強く意識させられた。

映画の主人公の母親は、決して死刑“廃止”派ではない。しかし、母親が、映画の最後に、自分の親族に述べるセリフは、“世間”の死刑存置の考え方に冷水を浴びせるものではないかと強く感じた。そのセリフについては、会員の皆様におかれましても、ぜひ、この映画を鑑賞の上、確認してもらえればと思う。そして、一度は立ち止まって死刑制度について考える機会を持っていただきたい。

2020年度 東弁役員等選挙 次期会長は 富田秀実会員

2020年度東弁会長、副会長、監事、常議員及び日弁連代議員の選挙が1月27日（月）に公示されたが、いずれも定員以内の立候補に留まったため、予定していた不在者投票および投票は行われなかった。

当選者は、会規により2月7日（金）午後4時の経過と同時に確定し、確定後、役員当選者の当選証書交付式が2階講堂「クレオ」で行われた。

同日に行われた日弁連会長選挙には、武内更一候補（東弁所属）、及川智志候補（千葉県弁所属）、荒中候補（仙台弁所属）、山岸良太候補（二弁所属）、川上明彦候補（愛知県弁所属）の5人が立候補した（届出順）。なお、今回の選挙結果により3月11日に荒候補と山岸候補による再投票が行われることになった。



2020年度新執行部

東弁役員選挙結果

■会長選挙 当選者（無投票）

富田 秀実（34期）

■副会長選挙 当選者（無投票・立候補届出順）

村田 智子（48期）

木村 英明（46期）

田島 正広（48期）

吉村 誠（47期）

深沢 岳久（49期）

箭内 隆道（53期）

■監事選挙 当選者（無投票・立候補届出順）

豊崎 寿昌（48期）

鈴木 敦士（51期）

※ 常議員、日弁連代議員名簿は
LIBRA4月号に掲載予定